人と業績

佐々木月樵先生

——近代の教学を荷負した情熱の人——

山田亮賢

一　急逝の衝撃

大正十五年三月六日　佐々木学長は突然逝去された。当時誰も予想しなかった一大不幸事が生じたのである。あれから半世紀近い歳月が経過した。その頃、大谷大学予科二年に在学していた私は、丁度学年末試験を受けていた時であったと記憶している。下級生であったため、学内事情がどのようになっていたかは知る由もなかったが、夢想もしなかった学長の訃報に学内全体が愕然として、急逝の真偽をさえ疑うほどであった。教職員も学生も全く頼り切っていた慈父を喪ったような沈痛暗澹たる空気が漂っていたことを感ぜさせられた。試験終了を待って、三月十一日に大学講堂で告別式が行なわれた。学生として末席に参列していたのでよくわからなかったこともあるが、稲葉昌丸、鈴木大拙、西田幾多郎等の諸先生が交々生ける学長に物言うように哀悼の辞を述べられたことは、強く印象に残っている。また学生の間にすすり泣きの声が起こり、大学としては空前の悲嘆の日でもあった。

宗務総長稲葉昌丸先生（一代間をおいて後の学長）が「今や君の親切な忠告を聞くことが出来なくなった」と悲し

まれたことは、私共の察知し得ない当時の宗門事情についてのよくよく複雑な問題があってのことであったであろう。また鈴木大拙先生が「佐々木君、君はなぜ逝ったのだ、まだ十年や十五年は生きられる筈であったのに、教授代表ということだから、個人的なことを言うのはどうかと思うが、君を失って私はこれからどうすればよいのだ」という意味の愚痴に等しいような嘆きを表白されたことが耳底に強く残っている。更にまた、来賓として参列された西田幾多郎先生が「佐々木学長の新たな大谷大学の構想は、帝国大学などには見られないものがあり、将来恐るべきものがあると期待していたのに」と惜しまれた。列席の諸先生の哀惜の辞は次々に続いて、このような悲痛な言葉を聞いていた私共にとっては、折角清新の気の漲った大学もこれで終りかとさえ感ぜられたのである。

私が入学した当時、学生寮の部屋のガラス戸に、誰かが「谷大は眠れる獅子だ」と落書していたことを見たことがある。眠れる獅子が今や起き上って、奮迅の活動に移る時が来ていることを示唆しているものと思われた。佐々木学長の大理想の下に、学内が一丸となって、佛教研究では世界の中心学府とするという気魄が横溢していたからである。こうした誇り高く、積極的前向の空気が全学に漂うていた時、佐々木学長が急逝されたことは、大学の最大不幸事であると言わねばならない。年齢五十一年になお満たない身で早くもこの世を去られることは、誰しも考えても見なかったことである。しかし、佐々木学長の死は、年齢的には夭折と言えるであろうが、実は必然的な結果となって起ったことと言い得る。それはあの有名な「大谷大学樹立の精神」を心して読めば、自ら明らかになると思う。その中に盛られている学長の大願と、企画構想は並々ならぬものがあり、ここまで辿り来たった学業と幾多の障害との苦闘を思う時、その背景的労苦は、先生の全生涯をも超えるものがある。新発足の大学を一身に荷負し、あらゆる困難を克服して、世界的な佛教大学を建設せんための捨身の行を実践されたのである。身心の燃焼が、遂に限りある肉体を磨滅してしまったと言い得る。

佐々木学長は郷里愛知県安城町（現安城市）国鉄安城駅前の岡本医院の二階の間で逝去された。先年、私はその最

後を診られた岡本晃医師に臨終の病状を聞く機会を得た。直接の病名は急性肺炎であったが、既にそれに抗する肉体が使い果され、恢復が困難であったと言うことである。その病室には嘗て岡本医師が佐々木先生に依頼し、言葉を選んでいただき、中村不折画伯に揮毫してもらった「無根信」の額が掛っていたそうである。奇しくも佐々木先生が好まれた「涅槃経」の文の下で往生されたのである。佐々木先生は体格から推して蒲柳の質ではなかった。外見肥満型の貫録ある身体の持主であった。従ってあの風丰からして早逝されるとは考えられなかった。明治三十七年四月十六日、浩々洞南椽で撮影した同人写真を見ると、多田鼎、曾我量深、安藤州一、暁烏敏等の諸先生の真中に佐々木月樵先生が悠然と腕を組んで柱に寄りかかって居られる姿を見る。その当時、最もよき体格に恵まれていられたようである。それら同人の中、真先にあの世へ旅立たれたのが、佐々木先生である。思うに先生は撓みなき学究生活を続けつつある中に、真宗大谷派の派内の難問題に絶えず心を砕き、宗門愛に情熱を傾けられた。殊に教学の根本問題を究明しつつ、思想界、宗教界、教育界全般に眼を向け、新時代に即しての刷新に意を注ぎ、内憂、外患を逃避することなく、矢面に立って受けとめることを辞せられなかった。そこには何か先生に宿命的な重荷が負わされていたようである。学問的業績が次々と挙げられてゆく中に、単なる専門的学究に止ることなく、護法殉教の宗教的情熱を燃し続け、それが教学的な帰結としては、新たに大谷大学の建設に精魂を打ち込むこととなったと言い得る。このような稀有の偉材が世に出たことの背景は何であっただろうか。本来の資質のあったことは否めないが、生い立ちの環境が多大の影響を与えていることを見逃すことが出来ない。

二　生い立ちの周辺

「闡彰院の死」や「法難と宗難とについて」の講演筆録において見られるように、真宗大谷派三河教団の中に培われた護法精神が、特に佐々木先生を根強く動かしていることが察知される。先生は明治八年四月十三日三河国安城町大

字古井願力寺山田家に生まれた。殉教者、石川台嶺師が二十九歳の若さで刑場の露と消えた明治四年から、四年後のことであった。先生の父親の兄も亦、石川台嶺師と共に獄屋に入れられ、牢内で病没している。明治初年の廃佛毀釈の波紋は全国各地に拡大されたのであるが、それが僧徒の結束蹶起となり、三河においては所謂、大浜騒動、菊間藩事件といわれる不測の不祥事件にまで発展した。事件の連累者三十余名の僧侶の中、首領としての石川台嶺師は斬罪に処せられたのであるが、三十余名の同志は投獄され、獄中に病没する者も生じたという悲惨な結果となったのである。この事件は真宗大谷派三河教団の僧侶、檀信徒に大きな衝撃を与え、逆に護法の精神をかり立て、永く教団内の語り草として、深く心底に銘記するところとなった。三河教団がその頃から特に結束の堅くなったことも、こうしたことに起因すると思われる。百年を過ぎた今もなお年々殉教者への追悼追慕の営みも行なわれているということである。この事件の中心人物は、多く京都の「護法場」に学んだ青年僧侶であった。「護法場」に学んだ青年僧侶が郷里三河において「護法会」を組織し、維新の混沌たる世相の中に護法運動を起こしていたのである。菊間藩事件の起る一年半前には京都より香山院龍温講師が秋安居に出講され、明治二年八月十八日より九月一日まで半ケ月にわたって「佛説法滅尽経」を講ぜられた。三河三ケ寺の一である野寺の本証寺におけるこの秋安居に四方より来会した僧徒四百有余人という記録を見るのであるが、その当時の雰囲気が異常なものであったことが想像される。この香山院講師を迎えた役員の中には石川台嶺師等「護法場」に学んだ青年僧侶の名を見るのである。このような事実から推しても、廃佛毀釈を縁として、護法の動きが一段と強く抬頭して来ていたことが窺われるのである。「護法場」に学んだ「護法会」の青年僧侶は京都において闡彰院空覚の薫陶を受けた人々である。伏見、西方寺の闡彰院師は明治元年八月九日に時代の趨勢に鑑みて宗学に加うるに所謂、外学研究の端を開いた。その意味で真宗大谷派の偉大な先覚者である。佐々木先生は「闡彰院の死」の中にそのことを強調して「明治初年における我が宗門の元勲は、何れも皆この門より出たことである。誠に、我が護法場は、我が宗門維新における松下村塾にして、明治元年八月九日は、恐らくは、宗

門教育史上、予は特記すべき所の記念日であると思う。これより、我が闡彰院には、正しくその総轄となり、日々漢訳の聖書を講じ、また「天路歴程」をも、集まり来る青年僧侶に授けて、以てそれぞれ時勢に順ずるの教育を施されたことである」と言っている。これによっても明らかなように、佐々木先生の内心を強く動かし、感動追慕し、随喜せしめた明治の先覚者は闡彰院師であった。このことはまた先生の晩年の「大谷大学樹立の精神」に深く連なるものがある。

しかし先生は闡彰院の生前に面授したのではない。先生の生まれる前に闡彰院は刺客の為に非業の最後を遂げられている。明治四年十月三日、剱先の嗣講寮においての悲しむべき出来事であった。享年六十八歳であったと言われる。実はこの闡彰院師が三河における菊間藩事件の後始末をつけるため、山命によって三河に出張され、各地を巡回し、事件の結末をつけた人である。しかも石川台嶺師が十二月二十七日刑場に消えるに先立って、此の世を去ってしまわれたのである。明治四年に真宗大谷派は、師とその門弟との二人の殉教者を出した。その後、程遠からぬ時に生まれた佐々木先生は幼少の頃から、家庭や周辺の人々から強く殉教者の影響を受けたに違いない。先生の周辺は事件の連累者が取り巻いている程の環境であった。先生は生家願力寺山田家において長じ、後、佐々木家に請われて養子となるが、それまでは、山田月樵と言われていた。小学校を終えて、岡崎市三河育英教校に進んだのであるが、ここにも若き学僧の護法的空気が漲っていた。年少者達であったが、地方における異色ある雰囲気の宗門子弟の養成学校であった。身近かに石川台嶺師の殉教の影響があったことは否定出来ない。その後の三河における真宗大谷派僧侶の護法的団結の教育的母胎がこの教校にあったとも言い得るのである。佐々木先生の同学の学僧には、舟橋水哉、多田鼎、その後に続いて大須賀秀道等の名を見るのである。後年何れも学匠として一家をなした人々であるが、この他にも随分優秀な人材がここから輩出しているとのことである。

三河育英教校において寮生活を始めた先生は、この時から家庭を離れて学業にいそしんだ。家庭教育を受けていた

少年時代は、よく両親に仕え、幼少にして寺務を手伝うという温順素直な性質の人であった。三男三女の中、次男であったが、両親の信頼厚く、長兄も弟妹も共に先生の人柄に敬意を表していたということである。一方に偏しない円満な性格は少年期の学業成績にもよくあらわれていた。どの学科も優秀で何か劣っているというものがなかった。図画なども巧みで、見事な絵を画いたと言われている。三河育英教校の学僧は、当時の事情として年齢的には差があって、可成り年長者もいたようである。その頃の或る先輩から耳にしたことであるが、先生は他の学友の非行なども咎めることをしなかった。寮の同室の学友が、禁ぜられている夜間外出をして飲酒して帰っても、何も言わず自分独り机に向っており、その同室の寮生が目醒めた時には、枕頭に水の入ったコップが置いてあったという。その頃から既に生徒間には、月樵は将来、大学の学長になるだろうという噂をしていたとのことである。何か人物の大きさが友人の間にも感じとられたものがあったに違いない。

三　清沢満之先生に師事

佐々木先生は、三河育英教校を卒業し、明治二十六年一月、京都に出で府立尋常中学校二年級に編入、後大谷尋常中学校に転じ、二十七年九月には、東本願寺第一中学寮第四年級に編入、その時、多田鼎、暁烏敏、安藤州一等の俊秀と同級生となり、後に清沢満之先生を主監としての浩々洞の同人が、既に期せずして邂逅したわけである。その時の第一中学寮の寮長は沢柳政太郎先生であり、教師には、清沢満之（当時徳永姓）、稲葉昌丸、今川覚神等の錚々たる人々が顔を並べていた。佐々木先生が清沢満之先生にめぐり会うことが出来たのは、この時である。幸運な邂逅ということが出来る。先生は明治二十九年七月この第一中学寮を卒業して、真宗大学に進学し、専ら佛教学に意を注いで勉学した。大学在学時代から、当時の佛教学研究の方法に疑問を持ち、後の研究課題「一乗教の研究」は、自らの佛

教研究の疑問解明のために選んだものであり、大学時代から生じていた内心の根本問題であった。この大学時代以前から在学中にかけて起こったのが、清沢満之先生を中心として、中学寮時代からの恩師達が顔を揃えて蹶起した宗門改革の運動である。従って護法精神に燃えた佐々木先生も恩師達の傘下に馳せ参じ、地方遊説にも足を運んでいる。所謂白川党の事件である。佐々木先生は「白河録」なるものを書き残しているが、この中に若き日の先生の強い護法の情熱が奔り出ているのを見る。このように先生の学生時代の環境はただ平穏に学業にいそしむのみの事態ではなかったのである。謹直円満な先生の内心には、事に直面しては、若い情熱の血をたぎらせたのである。白川党事件は改革の実を挙げ得ないまま終熄したのであるが、その間に佐々木先生は真宗大学を卒業した。明治三十三年七月のことである。大学卒業に先立って、在学中に即ち三十一年愛知県碧海郡矢作町上佐々木（現岡崎市）の上宮寺へ婿養子に入り、山田姓を佐々木姓に改めたのである。上宮寺は三河三ケ寺の一であり、由緒深い大坊である。

明治三十三年七月末、三河安城の碧海説教場（現碧海教会）において三為会が開催された。この三為会は今もなお大谷大学の在学生と、卒業生との同窓会として続いているが、清沢満之先生がこの会に出席された。この機会に多田鼎、暁烏敏の両先生が落ち合い、佐々木先生をもその会合へ参ぜしめた。その夜、清沢先生を囲んで談合した結果が、師弟揃って東京へ出ることになったのである。佐々木先生は、真宗大学研究院の入学願書を一旦取り消され、清沢先生を主監として共に相携えて雑誌を出すことに決定された。ここに雑誌「精神界」の生まれる最初の意義ある出発があり、後に名高い「浩々洞」の生まれる発端を見るのである。佐々木先生は、浩々洞において、清沢先生の膝下で、その薫陶を受けながら、「一乗教の研究」を続けられた。この「浩々洞」の生活によって、清沢先生の人格に一層深く触れることが出来、その後の佐々木先生の内心を一貫して動かしたものは、この明師の人格と信念であった。そしてその信念と念願を継承発揚することが、恩師に酬ゆるの道として一意精進せられたのである。清沢先生の膝下に参じた門弟同人は何れも異なる性格の中に独自の道を切り拓いて行った。兄たり難く弟たり難いと言わねばならぬ。し

かし佐々木先生は人間的な豊かさ、包容力において最も大きな存在であったことは、誰しも認めていたところであった。佐々木先生の没後編集刊行された「全集」の序文に沢柳政太郎先生が次のような称讃の辞を述べていられる。「洵に清沢師こそは、ヒマラヤ山上に清泉を湛えたる無熱池に比すべく、而してその源より流れし諸の川流の中に佐々木師こそは、一際目立った大河であった。その潤すところは広く且つ大であった」と。この沢柳先生の言葉は、そのまま清沢、佐々木両先生の内面的関係と人物の大なることを明らかにされたものと言ってよいであろう。

真宗大学は京都より東京に移転されて、明治三十四年十月十三日に開学式を挙げ、清沢満之先生が学監（学長）となられた。新たな大学の出発であったことは、その後、いつも、この日を大谷大学の開学記念日として今日に至っていることによっても知られる。佐々木先生は一旦は大学の研究院入学を断念されたが、改めて研究院に在籍することとなり、東京において研究院生活が続いた。清沢先生は、思いきって若い門弟を抜擢して、講義を受持たされたことがあったが、佐々木先生もその一人であった。佐々木先生宛の清沢先生の書簡に「佛教教理史」を担当して欲しいということが書かれているのを見る。

清沢先生が病没されたのは、明治三十六年六月六日であるが、その後も佐々木先生は、師の後をうけて守り、明治三十九年七月に研究院を卒業し、九月には真宗大学の教授に任ぜられた。浩々洞内にも色々問題が生じ、やがて大学もまた、再度京都へ移転することとなった。内心清沢先生の精神を深く守っていた佐々木先生は、大学の京都移転の決定によって、教授職を辞して郷里に帰り、しばし家庭生活に入られた。しかし大正元年九月には再び大学に迎えられ、研究と教育に専念されることとなった。その後の先生は逞ましく研究に学問的業績を挙げられ、病没されるまでの短い年月の間に三十有余の著述を物されている。

四　佛教研究の成果

佐々木先生の学問的業績の大半は没後早く刊行された「佐々木月樵全集」六巻に収められている。刊行の順序に従えば、第一巻「大乗佛教教理史」、第二巻「親鸞聖人伝」、第三巻「印度支那日本浄土教史」、第四巻「経論研究」、第五巻「佛心と文化」、第六巻「思索及雑華」である。この全集に洩れている著述としては、先生の没後、昭和六年一月刊行を見た『「漢訳四本対照摂大乗論」「附西蔵訳摂大乗論」「無著の摂大乗論とその学派」』である。また英文、独文の訳書、著書は「全集」外の物であるが、佐々木先生の学問的業績としては、真宗、佛教の海外への積極的はたらきかけが大きな意義を持っている。更にまた佛教の研究雑誌等に発表されたよき業績の一部は収録されていないものがある。一例を挙ぐれば、大谷大学「佛教研究」（第一巻、第二号）に載せられた「華厳経第三部の模型及び其素材に関する研究」などがそれである。佐々木先生の著述名を年代順に整理したものは「大谷大学歴代学長著作展観目録」（昭和十五年編）である。私は先生に親炙する機会は僅かであり、先生が著々と学問研究の業績を挙げられた過程についても多くを知らない。ただ「全集」六巻を通読することによって、学問の広さと豊かさという点で驚歎せしめられている。また旧来の伝統的学解から、常に新たな眼を以って教えの真意を生々と追究、解明せられたことに深い感銘を受ける。著述は大部の物、小部の物もそれぞれ先生の求道の跡を示すものであり、処女作「実験の宗教」から一貫して宗教的情熱の発露とも見られるものばかりである。その中、特に代表作と思われる二、三の著述に眼を向けて見よう。

第一に明治四十三年刊行の「親鸞聖人伝」と「親鸞伝叢書」とは佐々木先生の若き日に心血を注がれたと思われる名著である。聖人の歴史研究は、その後、史家によって今日まで目覚ましく進歩しているが、この書は佐々木先生が身を以て聖人の跡を訪い、六百五十年前の生ける聖人の真実に直参しようとした宗教的情熱の躍如たるものがあり、

所謂史実を超えて読者をして深い感動を与えずにはおかないものがある。親鸞聖人を慕った先生の人間性がここからも深く窺える。「箱根権現参籠記」などは、その実感を与える最たるものである。先年、先生の令息佐々木真祐氏が大谷大学へ寄贈された西田幾多郎先生の書簡の中に（この書簡は「親鸞聖人伝」と「親鸞伝叢書」とを佐々木先生が西田先生に贈られた返礼の書である）「……全編敬虔の念と渇仰の情とを以て描かれ、親鸞其人の人格に接する如き心地して、難有感ぜられ候、叢書の方も是非通読致し度と楽しみ居り候、基督伝を読めば、愛の中にもいかにも凛乎として一剣天によって寒き趣あり、何処か近き難くもかんぜられ候が、親鸞聖人に至っては、小春の日和の如く、静に温く、何事も打明け相談のできるわが慈父に接する如き心地いたし候……」と強い感銘の言葉を見るのである。私の乏しい経験の中においても、佐々木先生の「親鸞聖人伝」に随喜した数多くの声を聞いている。何としても佐々木先生の不朽の名著といわねばならない。

第二に注目されるのは、華厳研究の諸著である。「佛心及其表現」「大乗佛教大系華厳教学」「夜摩天宮会及其解説」「九夜神と佛妃」「華厳経の新しき見方」等代表的な物を挙げて見るに、その何れもが伝統の華厳学を消化して、そこに華厳精神を把握せんとする斬新な見地に立っての研究である。経典の文にしろ、教理にしろ、従来の研究には見られない生きた捕え方がしてあり、佐々木先生のみが見開かれたものと言うことが出来る。先生の後に華厳研究は進み、細部にわたっての考証はなされても、あのように魅力ある見方をしたものは見当らない。永遠に新らしい見方ということが出来ると思う。このような研究は佐々木先生のような人間性の豊かな人を待って、はじめて為し得られるのではないかと思われる。華厳に関しての私の思い出は、佐々木先生の晩年、大正十四年秋に、相国寺東、塔の段の仮寓に招いていただいた時のことである。先生は翌日、東京へ出張講座に出発すると言っておられた。華厳に関して何らの知識も持たなかった私に講座のテキストとして作られた印刷物を与えて下さった。「華厳文化と真宗」という講題になっており、第一講「華厳の芸術」、第二講「華厳の哲学」、第三講「華厳と真宗」となっており、その主要な講材

が順次に示され、佛像や経典の写真等も入っている。インドネシヤ、中部ジャワのボロブドール（Barabudur）の遺跡の一部の写真まで印刷されているを見る。先生ならでは出来ない講材である。確かその時、何も知らない私にその印刷物を示して、今後ボロブドールの遺跡の研究も必要なことを話して下さった。後に噂さで聞いたことであるが、この華厳講座は、東京で聴衆に非常な感銘を与えたとのことである。既にその時、先生の健康が著しく害されており、極めて無理を推し通しての出講であった。それがまた先生の涅槃講となってしまった。このテキストは不思議にも私の手元に残っており、五十年後の今、どこにも他には見出されないものかも知れない。

第三に晩年の業績として最も注目すべきものは「摂大乗論」に関する研究である。「摂大乗論」の研究は、先生の晩年、印度大乗佛教の論部の研究の一つであり、既に「中論偈頌」、「無著論集」、「世親論集」、更に逝去直前に刊行された「龍樹の中論及其哲学」と並行して為された苦心の研究である。その漢訳四訳対照研究は、遺稿となって、没後五年経って刊行されたが、宇井伯寿先生の「印度哲学研究」の真諦訳「摂大乗論の研究」と共に、今日に至るまで、この方面の研究に如何に大きな貢献をなしたか、計り知れないものがある。この間、先生に直接接しておられた山口益先生が「晩年の恩師が教学界に遺されし業績の二三を偲びて」（「観照」追悼号）と題して、その経過と意義とを明らかにしておられる。この中に、これら論部の研究を継承されたのが山口先生と宮本正尊先生であることが知られる。私の記憶をたどれば、先生の御逝去の一、二年前に「摂大乗論」の四訳対照の原稿を先生の仮寓で示され、先生の御苦心の話をも聞かせていただき、その努力に驚歎したことがある。

「親鸞聖人伝」から「華厳経の新しき見方」へ、更に大乗論部の研究へと進んで、遂に「摂大乗論」の対照研究となったこと、そこに先生の研究の独自の歩みがあり、このような研究経過を取った人は、稀有なことと言える。その必然性については、如何に忠実な学究者であったかを知らしめるものがあり、山辺習学先生が「人生の色読者」（「観照」追悼号）と題しての追悼文の中に、実によくその意義を明らかにしておられる。

第四に欧文の業績が忘れられてはならない。鈴木大拙先生と共訳の「英訳御伝鈔」(The Life of the Shonin Shinran with Illustrations)、「新しき東方の光」(Ein Neues Licht aus dem Osten)、「真宗研究」(A Study of Shin Buddhism)等がある。そこに先生の広い新たな視野に立っての業績を知ることが出来る。そこにはまた、鈴木大拙先生との並々ならぬ交流があったことは言うまでもない。即ち「東方佛教徒協会」(The Eastern Buddhist Society)がそれを物語っている。

大正十年八月宗教及び教育視察のため、沢柳政太郎先生、小西重直先生等と共に約一ヶ年欧米諸国を歴訪、帰朝後十二年十月一日に大谷大学長事務取扱に就任、十三年一月八日に大谷大学長に就任された。「大谷大学樹立の精神」は、十四年四月、新入生の入学宣誓式での講演であり、悲喜の涙の中に行なわれた先生の生涯の総決算であり、未来に向っての永遠の大願でもある。

附記　主な参考資料

佐々木月樵全集　六巻
観照第六号
大谷大学歴代学長著作展観目録
調和の饗宴（大谷大学三為会編）
明治の佛教者　下（常光浩然著）